

## 帰省

### 一

正嘉二年、聖人三十七歳の時、駿洲岩本の実相寺に入つて、一切経を閲覽されて、立正安国論を書かれたことはすでに述べたが、この閲経中に、聖人の父妙日死去の報が伝わつた。棄恩入無為、眞実報恩者と覺悟された聖人は、ついに故郷にも帰られず、立正安国論に身血をそそがれて、実相寺におられること二か年、鎌倉に帰られると立正安国論の献上、たちまちに草庵は焼かれた。千葉の市川におられること百日、草庵が再び出来あがると、鎌倉に帰られて、前にもまして折伏を続けたが、「日蓮が生きたるを、不思議として伊豆の伊東に流しぬ」といわれたごとく、伊豆に流されて、法華経の行者の修行を三か年つづけられたのである。

日蓮聖人の赦免にあつては、北条時頼の力があつたことは聖人の御遺文中にみられるところであるが、時の執権職たる長時の意向も十分にあつたらうし、長時の父重時の病死、重時の弟政

村の息女の怪異等々がめつたと思われる。

さて聖人は、今は赦免の身となつて、天下晴れての身体となられたのである。しかもその身は四六時中に法華經を修行し、いうならば、聖人の身体即法華經であつた。法華經には斯人行世間、能滅衆生闇とあるが、斯人とは聖人自分であると覺悟をされたのである。

法華經とは聖人にあつては、御宝前に安置し奉つるのみの經卷ではなく、これを身に行じてゆく生きた文字であつた。法華經の文字ごとくが生きた仏様であり、これを行ずるものはまことにその身そのままが仏様である。末代において仏とは法華經を行ずる凡夫をいうのである。聖人はかく考えて、両眼より涙を出すこと滝のごとしといつておる。

わが身は法華經の信仰に感涙を催し、伊豆伊東の三か年間の生活こそ、法華經に説くところに寸分の疑もなしと覺悟された時、この尊い身をこの世に送りだしてくれたところの両親のありがたさは、ひしひしと身にこたえるものがあつた。「孝と申すは高なり、天高けれども、孝よりは高からず、また孝とは厚なり、地厚つけけれども、孝よりは厚つからず」とは有名な聖人の孝行觀である。

自分は法華經の行者として、いよいよ難のきたるをもつて喜びとしておるが、これを生みなした両親は、特に母親はどんな心持でおるであろうか。伊豆伊東の流罪の生活は、末法において法華經を説きしものは、しばしばところを追われると、法華經の中に書かれてあるのだから、あえ

て、聖人にとっては流罪の生活は不思議ではないが、母親にしてみたら、子供が流罪の生活をしておると考えただけでも、たえられない毎日の生活であつたに違いない。

「父母の恩というものは、ここはことあたらしく書く程のこともなく、すべての人の知るところであるが、わけても子を養う母の恩を思うならば、心にしみみとありがたく、貴く思うものである。鳥がその子を養う姿、けだものがその子を養う様子など、よくもまあ、不自由な身をもつて子供を養うものぞと、不思議にさえ思う程である。それにつけても、人間の子を育てる母親の恩は、なかなか忘れることのできぬものである。

胎内に宿る九か月の間の苦しみは、腹は鼓のごとくはれ、頸は針をさげたるのごとく、まげることならず、いきは、はあはあと出るばかりで、はいることはなく、顔の色は枯れたる草のごとく、臥せれば腹もさけるような心持ちになり、座わればとて体のやすまることもなく苦しみが続き、やがて産気が近づけば、腰はやぶれ眼はぬけて、天にのぼるかと思われる。かほどにわれを苦しめる敵なれば、産みおとしたならば、大地にもふみつけ、腹もさいて捨ててやろうかと考える程のようであるが、急いで抱きあげ、血をねぶり、不浄をすすぎ、胸にかきいだいて三か年の間、ねんごろに養う。母の乳をのむこと、百八十石三升五合である。この乳のあたいはたとえ、一合といえども、三千大千世界にかえることのできぬものである。されば、乳一升の価格を米にしてみれば、一万一千八百五十石五升、稻にすれば、二万一千七百束あまり、布に換算すれ

ば、三千三百七十反である。してみるならば、母乳の合計、百八十石三升五合の価格は大変なものになるのである。他人のものは、銭一文、米一合なりと屯盗んだならば、牢に入らねばならない。ところが、親は十人の子をば養つても、子は一人の母を養うものはない。暖かな夫をば抱いてねても、ここへたる母の足を暖むる女房はないものである」

これは聖人が信者の婦人に与えたお手紙の一節であるが、聖人の婦人に対する理解の程も察せられ、母親に対する気持の程もうかがわれるのである。

聖人を伊豆の伊東に流した当局者としては、北条時頼、重時、長時の三人であつたが、重時は聖人の流罪中に死去し、聖人が赦免になつた年に北条時頼も他界し、つぎの年には長時も死んで、時の権力者として、聖人に圧迫をくわえたものは、不思議なことにはたばたとわずか二、三年の間に死去してしまつたのである。

文永元年の八月聖人四十三歳の時、十一年ぶりで、故郷の小湊に帰省せられた。いうまでもなく、聖人の生家のある小湊は、安房の国は東条の郡にある。その東条の領主、東条佐衛門尉景信は、大の念仏者であつて、聖人が、立教開宗の日に、白刃をもつて聖人をおびやかした豪の者である。

聖人が十一年も帰省せず、父妙日の死去にも帰郷しなかつたのは、この東条景信の圧迫をおそれたからであると、説をなすものさえある。筆者はそれを信じない。聖人の歩んだ路から考え

れば、そんな東条ごときの圧力を考慮する方ではない。立正安国論の執筆者、松葉谷の焼討ち、伊豆伊東の流罪等々、まったく帰省をすまいとまがなかつたのである。「日蓮は日本第一の孝の者なり」と自負せられる聖人にとって、この十一年間は心にどれ程帰省を念じられたことであろうか。父なきのちの母妙蓮は、ひとり身のわびしい中に風のたよりに聖人の鎌倉のうわさをきき、伊豆伊東流罪の話を鎌倉から帰ってくる人びとや、旅のものからかいて、どんなに胸が痛んだことであろう。

今日から考えれば、聖人の父となり母となつた人は釈迦多宝の生れ変わりのごとく、功德すぐれた方々と、われわれは考えて、妙日、妙蓮を羨望するのであるが、聖人当時のご両親はいかに聖人のことを心痛せられたことであろうか。けだし寿命のちぢむ思いであつたと思われる。だが、これはわれわれの凡情で、偉人の母とし父とし、仏さまの御両親として、いかなる変事にも、驚くことなく、聖人の心とご両親の心とは、通じて絶えることがなかつたかもわからないのである。聖人が、小湊の生家の軒をくぐつたのは、父妙日の七回忌の年ではあるが、二月十七日の忌日をとくにすぎた八月であつた。

聖人が生家にたつた時、聖人は眼にはみえぬが、太い綱があつて母のそばに、きゆうにひつぱられるような不思議な力を身にひしひしと感じた。

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

聖人は、庭にたつたまま、思わず題目を唱えられたのである。

「お聖人さまだつ」

あわただしい声で、家人が矢のように家の中からはだしのままで庭にとびだしてきた。

「知つて帰りましたか。知らずに鎌倉から帰えられましたか。お聖人さま……………」

聖人は家人に返答を後にして家の中に向つて題目を唱えられた。

「南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

……………」

「聖人さま。母じやは只今、いきを引きとられましたぞ。たんだか、側に子息がきておるような、いやいや、お聖人がもう、その村の口まできておるような気がしてならぬ。死ぬのはおしいおしいと、いつておりましたが、たつた今いきを引きとつたのです。もう一足はやかつたらなあ、お聖人さま」

聖人は。再び高声に御題目を唱えられた。

「南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經」

「お聖人さま、さあさあすすぎの水を汲みまずぞ、おうい、誰かでてこいよ。広くもない家のくせに、誰も出てきおらぬ。実は、お聖人さま、縁者の四、五人が奥の座敷で、母じやの死顔を真中にして、泣きくさっておりますだ。今年は亡くなった父者の七回忌、お迎えがきても不思議ではないが、それは、一目、お聖人さまに母じやもあいたかつたであらうと皆んな思っておつたところです。考えると、それがふびんで、皆んな泣いております。おうい誰か出てこいよ」

家人が悲しみの中にも、聖人の帰省を喜んで家の者を呼ぶのであった。

「さすがは善日さま。いや、善日ではない蓮長さまでもない。そうそう日蓮さまではもつたいない。お聖人さまだ。ようく、母じやの死にめに帰つてきてくれた。これが本当の坊主だ。親の死にめに間に合わぬようじゃ、いくら出世したといつても、本当の坊主とはいえますまい。さあさあ早く枕経を読んでやって下さい。引導をわたしてやって下さい」

聖人は一段と大きな声で、

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

と唱えられて一心不乱であった。

「誰かでてこいよっ」

と庭からよんだ時だった。

「大変だ。大変だ」

と座敷から、とび出してきたものがあつた。

「どうしたっ」

「どうしたも、こうしたもあるもんか」

「それじゃ、変わったこともないのか」

「なにを、こんなあわてた時に、理屈をいう奴があるか、仏さまが生き返えつちやっただ」

「ええつ、狐か狸でもついたんじゃねえかよう。俺は側にいくのは厭だよ」

「この馬鹿野郎め、手前がでていった後、おれ達は婆さまに死水をくれてやろうと思つていと、庭さきの方から、お聖人さまの題目の声がきこえたなあと思つと、その一声一声ごとに顔の色が、つやづいて、今さつき、ううんといつて大きな息を吐いて生きかえつてしまつたんだ。お聖人さま」

聖人は、二人の話に耳をかすことなく、まことに生きた仏様のごとく尊い姿のまま、南無妙法



蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と唱題されておるだけであつた。

一一

「日蓮法師とは、誰のことよ」

「知らないのか、貫名さまの御子息だ」

「へえっ」

「へえつて、お前も知つてる筈だ。小さい時は、善日磨さまといつておつた」

「ああ、あの坊さんか、知つてる、知つてる」

房州の小湊の浜の砂地である。

老人の漁師が、四、五人あつまつて、網のつくろいしながら話し合つていたのであつた。

十月のひざしは、老人の潮にやけたまつくろなうなじを照りつけていた。

海はどす黒くなつて、にぶい光を放ち、わずかに岸によせる波頭が白くくだけで、その動きをみせている目であつた。

「あの坊んなら知つてるぞ……」

「今は坊んではおかしいぞ。たしか、今年は後厄（四十三歳）ぐらいになるはずじゃ」

「あつはつは、坊んではおかしいなあ、だが、故郷にすれば、四十、五十はまだまだ鼻たれ小僧じゃ、俺がなあ、家に帰れば、まだまだ鼻たれ抜いだから……」

「お前の家は格別だよ。あの大隠居にかかったら、村中が鼻たれ小僧だ」  
老人の口々から、どつと笑いが起った。

「あの坊んはなあ……」

「坊んではおかしいというに……」

「ええい、やかましい。坊んで、よいわ。俺は昔、頭をなでてやったことがあった。俺が大漁でよい機嫌で浜から帰える時であった。坊んが、ひとりで遊んでおったので、魚籠の中に手をつこんで、おい坊ん、大きな鯛をやるぞといって、坊んにやったのだ。すると坊んは、ありがとうといったが、波打ち際に持つていって、その鯛を水の中へ放ろうとするのだ。俺はびっくりして

「おい、坊ん。なにするんだ」

と思わず、どなったんだ。すると坊んは、

「おじさん、この鯛は、私にくれたんでしよう」ときくんだ。

「そうだ……」

というと、

「ならば逃がしてやって下さい。この鯛だって、お父さんもお母さんも、兄さんも弟もいるでしょう。殺したらかわいそうです」

というんだ。俺は、びっくりしちやって、返答が一寸出来なかった。

「そんなこと言っちゃ困るよ。それじゃ、漁師はどうしたらいいんだ。捕って逃がしていたんじや商売にならない」

といったら、

「おじさん達は逃がさないでも、それでいいんだ………」  
ときた。

「なんで、俺と坊んとは違うんだ」

ときいた時に、坊んが感心なことをいった。それで、俺は、この時のことを、今でも忘れないでいるんだがなあ………。

「なんと、いったんだよ、坊んは、その時」

きき手が、話を促した。

「おじさんは漁師だから、魚を捕るのが役目、だから捕った漁を逃がしたりしなくてもよいのだ。けれど、坊んは漁師でないから、逃がしてやるんだ。漁師は魚をとって人の栄養の助けとなるのが役目だ。漁師が魚をとるのをなまけたら、それこそ本当になまけ者だ。だが、坊んは漁

師ではない。だから、生き物を可愛いがらなければいけない。今、おじさんの手を縁として、坊んに伝ったこの鯛は、坊んの手に渡った時は、助けようと思えば、助かる魚になっていたんだ。おじさんは、その魚籠の中の魚を助けたら、自分が助からないだろう。そこが違うんだといった。商売の人が魚を捕るのは生きてゆく以上は仕方がない。だが、商売でもない人が、自分のすき勝手で魚をつかまえるのは殺生ということになるのだと、この俺に教えてくれたのだよ。俺は、思わず嬉しくなっちゃって、あの坊んの頭を撫でたのだ。こんな村に、子供のくせに、偉いことをぬかす餓鬼がいると、俺は嬉しかった」

語り終った老人は、その時のことをありありと思い浮かべているような眼差であった。

「そうだろう。そうだろう。善日磨さまは、子供の時から、どこか違っておった。そんなことぐらいはあつたらう。けっして不思議なことではないわ。母の梅菊さまが生まれる前に、叡山の頂きに腰掛けて、琵琶湖の水で手を洗って、富士の山から登る旭日を抱くという夢をみて生んだとかいう話だ。そのくらのことはあるはずだ」

そうだ、そうだと行って、老人は互いに合点しあうのであった。

「ジイラ、ジイラ……」

「……」

「爺等………」

「じいらとはなんだ……」

「爺さんばかりだから、じいらだ。ごうつくばりの爺さんばかりだから、ごうジイラというかもしれないな」

「なにを、若い者がいうか。なんの用だ」

老人達はいっせいに、自分達の側に突つたつた若者をみあげた。

「もうじき、皆んなも来るが、俺か頼まれて先にやってきたんだ。実はなあ………」  
「ごういいながら、若者は、老人達の仲間に加わつて話を始めたのである。」

「日蓮法師のことなんだ」

「なに、日蓮さんのこと、お聖人さまに関係のある話か………」

若い者が、お聖人にどんな関心を持ったのか、老人達は不思議に思つてきくのであつた。

「噂によれば、お聖人さまは死んでしまつたお母さんを、お題目とかの法力で生き返らせたとかの話ではないか。本当かい」

「本当とも、現に俺はその時、その場所にいたんだ……」

老人の一人が、確信のこもつた声で返答をした。

「そうか。それが本当なら、日蓮法師に……」

「おいおい聖人といえ、もつたいない、お名前などを呼んで」

「日蓮を日蓮と呼んでどこが悪いのだ」

「若い者は面倒なことよ。一つ一つ語ってきかせねばならないか。お手前は親御の名前を呼ぶか。呼ばぬじやろくなあ。お父さん、お母さんと呼ぶだろう。耳にしても口に出せぬもの、親の名前ということがある。両親をありがたいと思う尊敬の念が、親の名前を口にださぬのだ。日蓮法師に頼むことがあるならば、お聖人といいなさい」

「爺等に会ってはかなわない。頼みごととは察しのよいこと。では、そのお聖人さまを子供の時分からよく知っておる、年寄り衆に頼みがあるんだ」

「なんの頼みだ」

「年寄りには、そうやってのん気そうに網をそそくっておるが、その網で魚がとれるか。どういう訳かここ四、五か月一向に漁がないではないか。魚はとれぬし、それに加えて陸ではえたいの知れぬ病気がはやって、この浜辺の家で、病人の寝ておらぬ家は一軒もないわ。これを、お聖人さまになんとかしてもらってくれないか。わが母親を死んでも生きかえずという程の法力があるならば、こんなことは朝飯前だろう。どうだ」

「馬鹿っ」

「ええっ」

若者は、一寸老人の語気に驚いた。

「そんな勝手な考え方で、お聖人さまに頼みにいけるか。お前達はどうか。お聖人さまの悪口をいったことはなかったか。お聖人さまのお母さんをいつもいたわってやっていたか。この老人の俺達だって、腹では本当に頼みたいと思っけていても、一寸口に出せないでいるんだよ。あのお聖人が伊豆の伊東へ流されたと風のたよりできいた時、この村中の人はなんといったつげなあ。ほめた人がいたか。謀叛人でもこの東条の小湊村から生まれたように騒いだでねえか。どうか。お聖人さまが、伊豆の伊東に流されていた足掛け三年の間に、誰がお聖人さまの留守の家について、あのお聖人のお母さんを慰めてやったか。この中にそんな奇篤な人がいるか、いたらその人が頼みにいけばよい。お聖人さまはさっそくひき受けてくれるだろう。だがなあ、そんな人がここにはいないんだよ」

「ようし、わかった」

若者は元氣よく立ちあがった。

「どうしたんだっ」

老人がきくと、若者はすぐ答えた。

「お聖人さまに頼みにいくんだ。年寄りは何時だって、今の案配だ。今俺達は本当に困ってるん

だ。だから頼みにいけばいいんだ。ただ頼みに行く心持に嘘があつてはいけないが、俺達は嘘の気持は微塵もありはしない。年寄りには、昔あだつた、こうだつたと、そんなことばかりいつている。そんなことは年寄りのした不義理で、若い者が知ったことか。島流しに逢うなんてのは、謀叛人ぐらいだからお聖人が島流しになつたといえれば、謀叛人だろうというのが、あたりまえさ。今になつてみると、あまり法力があつたから、流されたのかもわからない。この村に病気がはやる、一向に不漁<sup>しけ</sup>で魚がとれないというんだもの。この村に生まれたお聖人だ。なんで、頼めばほうつておくもんか、俺一人でも頼みにいつてみるぞ」

「お前、いままで仏さまを拜んだことがあるか」

「ないよう」

「若い者は幸せだ。南無阿弥陀仏も、南無遍照金剛もいつたことがないのかよ」

「ううん。そんなことは一辺も唱えたことはないよう」

「それじゃ、お聖人さまに頼みにいく資格が、ひよつとしたら、あるかもしれねえぞ」

老人達はどつと笑つたが、若者は解せない顔をして老人達の顔をみていた。

文永元年の九月のある日である。



小湊の聖人の家の前の浜から、一一艘の小舟が動き出した。櫓をこぐのは先日の若者である。船先には南無妙法蓮華經と書いた旗が、潮風にいさましくなびいていた。聖人はその許に端座されて、静かに經文を読まれておる。若者はへさきの旗を睨みながら、

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

と一押し一押しに題目を唱えて、櫓を押すのである。

船は一定の間隔をおいて、小湊の浜の渚にそって、静かに滑べっていった。子供達が、わいわいといいながら、聖人の船を浜の砂地に追いかけてゆく影がみえた。

子供の列の中には犬が二、三匹まじって、後になり先になりして走ってゆく。

浜の砂地をよくみると、ある場所で、突つたつたまま腕を組んで見ているもの、あるところでは、土下座して聖人の船をおがんでいる者、中には寝ころんで肘をついて聖人の船を、あざけり顔で眺めているもの、綱つくろいでもしておるのか、聖人の船に全然背中を向けて無関心の者、浜の人びとの表情は複雑であつた。

聖人は若者から村の様子をきくと、にっこり笑つて承諾されたのである。その時分、この小湊村には、わけのわからない病気が流行していた。若者のいう通り、病人のいないという家は一軒

もなく、その上悪いことに不漁つづきで、一匹の魚もとれないという始末であった。聖人のお母さんもやはりこの病人の一人であったのである。

聖人は若者に船を一艘用意せよといわれた。

小湊の浜にそつて船を出せといわれ、御自分は題目の旗をたてて静かに読経されたのである。これでもいいかしらと不思議がる若者にはいっこう無頓着であった。

「お聖人さま………」

若者は、櫓の手を休めて、声をかけた。

「お聖人さま、ご覧なさいまし、船のまわりを鯛がとりまいて泳いでいますよ。不思議なことでございます………」

「……………」

「先き程から、この船を追っかけて泳いでいましたが、だんだん数がふえてまいりました。大きな鯛でございますなあ。上からみるとあまり大きいので鮫のようにみえますが、あれでも鯛ですよ。こんな大きな鯛が、この辺にこんなにいたとは知りませんでした」

若者が両手で船端を叩くと、それに応ずるようにして、鯛が船のまわりに飛び上るのであった。

「おう……………」

聖人はその壮観さに、思わず歓声をあげられた。

「お聖人さま、これで、村中の病人もきつとなおりましょう。村の景気もよくなるような大漁がきつとありましょう。ありがたいことでございます。この沢山な鯛の群れはその前兆でございます。ああめでたい、めでたい。ご聖人さまのお供をしたこの鯛どもは、孫子の代まで、この浜では、捕らせないようにいたします。あれあれご覧下さい。鯛がお聖人さまの顔を拝もうと、あんなに何匹も飛び上っておりますぞ……」

